

『パンセ』の印象的な短い断章について

山 本 省

序

『パンセ』には一度読んだら忘れることのできないようなきわめて印象的な短い断章がちりばめられている。

劇の他の場面はいかに美しくても、最後の場面は血なまぐさい。ついには頭から土をかぶせられる。それで永遠におしまいである。(165)⁽¹⁾

我々は断崖が見えないように何かで眼をおおい、それから平然としてその中へ飛びこむ。(166)

このような劇的な断章が可能になった理由として、まずパスカル自身の体質を、そして『パンセ』のなかには読者の理性に語りかける断章に加えて主として想像力に訴えかける断章があるという事実をあげることができるというのが我々の考えである。

I

パスカルの姉のジルベルト・ペリエによる『パスカル氏の生涯』の次のような表現に注目してみたい。

彼に欠点がなかったわけではありません。でも、彼に対してなら、まったく何の気兼ねもなく、それを指摘してあげられるのでした。友だちが正しい意見を言ってくれる時には、心から従順にそれに従うのでした。友だちが間違っている場合でも、いつでも穏やかに意見に聞き入るのでした。彼の精神はきわめて明敏でしたので、どうかすると、いらいらして辛抱できないという様子を見せることがありました。けれども、いったん忠告を受けたり、また、自分でも短気のために人を怒らせたことに気がつきますと、さっそく実に誠心誠意なやり方で、自分の過ちを直そうとしますので、このために人の愛情を失ったということは、めったにありませんでした。(30頁)⁽²⁾

パスカルの精神が明敏すぎたので、ときには他人の心を傷つけることもあったということが了解される。さらに上の引用文の少し先に次のような記述も見られる。

彼を知らない人が、彼が人と会話しているのを聞きますと、最初はびっくりしたものでした。と申しますのは、いつも彼は、何かしら人を威圧するような、威丈高な態度をとっ

ているように見えたからでした。けれどもその原因も、結局彼の精神が明敏に動くという同じ理由にあったのでした。彼と一緒にいますと、間もなく、このような態度のなかにもどこことなく好ましい感じがあるのに気がつき、最後には、彼の話の内容に満足するばかりか、その話し方にも満足するようになるのでした。(30頁)

ジルベルトにとっては、パスカルと一緒にいると間もなく気にならなくなってしまいう「威丈高な態度」が、はたして他の人々にとっても常にそうだったかどうか。これも場合によってはやはり耐えがたいものであったであろうということが想像できる。その原因はここでもパスカルの「精神の明敏」さに求められている。

ジルベルトのこのパスカル伝はきわめて中庸をえたもので着実な記述に裏打ちされている。だからこそ弟ブレーズの欠点にも触れざるをえなかった。パスカルには頭の回転の早さのため話相手の回転の遅さに苛々してしまう、あるいは一方的に自説を力説してしまうという欠点があった。そうしたことにパスカルが気付いたときには理性で自らを制御することができたようだが、そうした寛容の精神の欠如と高慢な態度が彼の体質として存在していたことは否定できない。『パンセ』のなかにもそれを反映するような文章がある。

先ず寛容の精神の欠如。長くなるが断章すべてを引用する。

1つの徳、たとえば勇気を、どんなに極端に持っていても、極端な勇気と極端な寛大とをあわせ持っていたエバミノンダスに見られるように、同時にその反対の徳を極度に持っているのではなければ、私はそれを称賛しない。何故なら、もしそうでないならば、それは上昇ではなく、下落だからである。人は1つの極端にあるからとて、その偉大さを示すものではない。むしろ同時に2つの極端に達し、その中間をすべて満たすことによって、それを示すものである。けれども、それは1つの極端から他の極端への靈魂の急激な運動にすぎないかもしれない。靈魂は、実は、松明の火のように、1点にあるだけにすぎないかもしれない。それなら、それでいい。だが、そのことは、靈魂の広さのしるしでないまでも、少なくとも靈魂の速さのしるしではある。(681)

事例を伴った思考の提示、その一般化とその敷衍。だが、パスカルは途中で苛立つ。読者の思考の遅さに我慢できないかのように、「それなら、それでいい」という掛け声とともに短く結論が述べられて断章は終わる。この無限の速度で動く1点というテーマはパスカルには親しいものである。「私は君に、無限であってしかも不可分なものを1つ見せよう。それは無限の速さでいたるところを運動する1つの点である。何故なら、それはあらゆる所において1つであり、おのおのの場所において全体であるからである。」(420)

この断章は、最初はむしろ「靈魂の広さ」を、つまり1つの極から別の極までを覆う精神の空間的な広がりを目指しようにして開始されたのだが、その力点はすぐさま運動へと移動してしまう。この2つのテーマのバランスのとれた発展が期待されるのだが、しびれをきらしたかのようにパスカルは靈魂の速さのみ結論することを甘受する。「それなら、それでいい」という断念の仕方がいかにも唐突であるのに我々は驚かざるをえない。

この断章の終わり方は読者の頭の回転の遅さに苛立つというよりも、むしろ、うまく思考

の脈絡を展開していけない自分自身に対してパスカルが腹立たしきをおぼえているかのような印象さえ受ける。常日頃相手を自分の議論で圧倒することに慣れているパスカルが珍しく威丈高な態度を持続できなくなった自分に我慢ならないのである。

ではつぎに威丈高な態度が存分に発揮されている文章を挙げてみる。

そもそも位を奪われた国王でなくして、誰が国王でないことを不幸だと思うであろうか。
(中略)

自分に口が1つしかないのを、誰が不幸だと思うであろうか。眼を1つしか持たないのを、誰が不幸だと思わないいられようか。眼が3つないからといって、それを悲しいと思った者がかつてあったらどうか。だが自分に眼が1つもないとしたら、諦めるにも諦めようがないであろう。(117)

この断章において証明すべきことは「人間の自然性は今日では動物のそれと等しいとはいえず、かつては彼自身のものであったいっそう優れた自然性から、墮落したのだということ」である。執政官をやめても気の毒だとは思ってもらえないエミリウスと、王位を奪われて大いに同情されたペルセウスという2つの対照的な具体例が示されたあと、最後のパラグラフで口と眼をめぐる執拗な議論が展開される。

原文は2つの文でできているが、便宜上訳文は4つに分かれている。そのうちの第2、第3の文章で言わんとするところは過不足なく表現されている。ところが眼とは関係のない口で文章は開始される。では口のみを話題にしたらどうであろうか。口は元来1つついているのが自然であるから、比較できるのは2つとゼロの場合である。その場合大体次のようになるであろう。「自分に口が1つしかないのを、誰が不幸だと思うであろうか。口を1つも持たないのを、誰が不幸だと思わないいられようか。だが口が2つないからといって、それを悲しいと思った者がかつてあったらどうか。」全体的に平板で躍動感が感じられない。

それよりも普通2つついている眼を話題にした方が揺れ幅が広がる。口と眼のつなぎは1という数で可能になる。同じ1つの場合でも口なら自然だが眼となると不幸である。口から眼へと話題を転じることによって自然から不自然へと移り変わる。また、読者の関心が口から眼へと動き、話題の多彩さということからも議論が一般性を帯びてくる。さらに最後のゼロが有無を言わせぬ圧倒的效果を発揮する。それまですでに十分に議論を有利に進めてきていながら、最後に止めの一撃を加えることによって、この断章は完璧なものになる。数字は1に発し、潜在的に2つの眼が存在し、3、さらにゼロに到達する。

II

『パンセ』のなかの「私」をパスカルと同一視するのは危険であるが、パスカルの分身であることは否定できないであろう。その「私」の優秀性については次のような記述が見られる。

私は、かくも悲惨な状態にありながらどうして人が絶望に陥らないでいられるのか不思議でならない。私は、自分の周囲に、同様な性質の人たちがいるのを見る。私は彼らに向

かつて、私より以上に知っているかどうかを尋ねてみる。彼らは私に、否と言う。そこで、これらの悲惨なさすらい人らは、自分たちの周囲を眺めまわし、何か面白いものが見つかり、それに没頭し、それに執着した。だが私は、とうていそれに執着することができなかった。そして、私が見ているものの他に何ものかが存在すると考えた方がいいような気がしたので、私は神が自身の印を何かしら残してはしないかと探し求めた。(198)

パスカルが自分のことを比べる者のないくらいの大天才だと自覚しているのはいいとしても、上のように文章になってははっきりと出てくると、読者としては、やはり、複雑な感慨にふけらざるをえない。ニーチェの例を想起するまでもなく、あらゆる人間より優れているということは、ほとんどキリストの位置に自分がいると言うに等しい。そして仲介者として人間を神の方向に導く。キリストの行為に類似する行為をパスカルは『パンセ』で実行しようとする。「彼が誇るならば、私は彼をへりくだらせ、彼がへりくだるならば、私は彼を讃える。かくして彼が自己を不可解な怪物であると認めるまで、私はいつまでも彼に言いさからう。」(130) パスカルは自ら仲介者となる。

私は彼らに幸福な音信を伝えよう。彼らのために1人の救い主がある。私は彼らをこの救い主にひき合わせよう。彼らのために1人の神があることを、彼らに示してやろう。そうでない人々には、私は神を見させはしないであろう。私は彼らに、1人のメシアが約束されており、このメシアは彼らを敵の手から解放してくれることを知らせよう。しかも、メシアが来たのは、罪から解放するためであって、敵から解放するためではないということ、私は彼らに知らせよう。(269)

パスカルの偉大は、断章681に指摘されているように、こうした聖性とともに通俗性をもあわせ持っているところにある。自己を神と比べることの愚かさについてはパスカル自身折りにふれて自戒している。「自己の自愛心、自己をうながして神になろうとさせるこの本能を、心のうちに憎まない人は、まったく盲目である。」(617) さらに「自我は嫌悪すべきものである」(597) というかの有名な断章がある。後半を引用してみる。

要するに、自我は2つの性質を持っている。それは何ごとにつけても自分が中心になるという点で、それはすでにそれ自身において不正である。また、それは他の人々を従属させようとする点で、他の人々にとって不都合である。何故なら、各人の自我はたがいに敵であり、他のすべての自我に対して暴君であろうとするからである。君は、自我の不都合な点を除き去りはするが、その不正な点を除き去りはしない。それ故、自我の不正な点を嫌悪する人々に対して、君は自我を愛すべきものとさせることはできない。自我のうちに自分たちの敵を見出さない不正な人々に対してのみ、君は自我を愛すべきものとさせることができるにすぎない。それ故、君は依然として不正であり、不正な人々をしか悦ばせることができない。(597)

自我は「自分が中心になる」ということと「他の人を従属させようとする」ことにおいて

嫌悪すべきものである。アポロジーを書くパスカルは、読者を自分に引きつけるのではなく、「救い主」のもとに読者を導くことを意図する。また読者を『パンセ』の議論に引き込むのも、自分に従属させるためではなく、「救い主」への道を示すためである。このことは充分に了解できる。

しかしながら、ジルベルトが洩らしているように、パスカルは時には高飛車な態度で相手を説得することがあった。アポロジーを書くということ自体がすでに読者を自分の議論に引き入れるということを前提にしており、アポロジーの成功のためにはそれはほとんど不可避であると言いうことができる。もちろん、読者を説得することは必ずしも読者に作者を信奉させることとつながるわけではない。にもかかわらず、パスカルは極端に走ることを常に警戒する。

ピロニスム。

極端な精神は、極端な精神喪失と同様に、狂愚として非難される。中庸以外には何もよいものはない。そのことを決めたのは多数の人々である。人々は、どちらの端を通してにせよ、中庸から脱け出る者を悪く言う。私は必ずしも中庸に固執しはしないが、そこに置かれることに同意する。私は下の方の端に置かれることを拒絶する。それは、そこが下の方であるからではなく、そこが端であるからである。何故なら、私は上の方の端に置かされることも、やはり拒絶するであろう。中間から逸脱することは、人間性から逸脱することである。人間の魂の偉大さは、いかにして中間に身を持するかを知る点にある。偉大さは中間から逸脱することにあるどころか、むしろそこから逸脱しないことにある。(518)

パスカルくらいに並外れた人物にあっては何をしても桁外れなので、中庸に固執すれば今度はそのことで中庸から外れてしまう。このことについてもジルベルトは雄弁に語っている。「彼自身が他人に執着を抱かなかつたばかりか、他人が彼に執着することも弟は望みませんでした。私の言うのは、罪深い危険なある種の執着のことではありません。それが卑しむべきものであることは誰もがよく承知しております。そうではなく、もっとも罪のない愛情のことを申し上げているのです。そうした愛情の楽しみこそ人間社会の普通の潤いになっているのです。彼が、何よりも厳格に自分を戒めていたことのひとつが、このことでした。ほんの少しでも、そのそぶりが見えると、彼は、そうした思いにとらわれないように、また、それに流されないようにと自分をいましめるのでした。私はもちろん、そのような完全な状態からはほど遠い者ですし、弟のように、家族の喜びのもとになっているような人の世話なら、どれだけやってもやりすぎることはないと思っておりますので、弟のためになることなら、また、自分にできることで弟に愛情を示しうることなら、それこそどんなに一生懸命になることも決していといたませんでした。」(29頁) 自分の愛情に弟パスカルが充分に応えてくれているとはとても思えなかつたジルベルトの反応は次のようなものであった。「うわべだけ見ていると、私の気持ちにひびいてくれますほど、自分の尽くすべき分を尽くしてくれていないように思えて仕方ありませんので、私の気もなぐさみませんでした。」しかし、いつものように忍耐強いジルベルトは、パスカルの死後、彼女に対する彼の「控え目な態度の秘密」がすっかり理解できるようになったと記している。しかし、パスカルの節度ある態度がいかに

に清らかであろうとも、これもひとつの極端だと言えなくもない。もっとさばけた生き方も可能なはずである。

パスカルは隣人によく思ってもらおうなどとは一切考えなかったが故に、ジルベルトにも自分のことを説明したりはしなかった。ジルベルト以外の人々も、当然のことながら、パスカルを誤解しただろうと予想される。弟子たちにまで充分には理解されていなかったというキリストが思い出される。そのキリスト像は「イエスの秘儀」という凝縮した一連の断片のなかで鮮やかに描き出されている。その場合と同じく、パスカルの行為も象徴と形容すべきものになりえている。

聖人を思わせるなこうした生活と、既に検討した高飛車な態度、両者の共存がパスカルを揺れ幅の大きな人物にしている。「人は一方の極端にあるからとて、その偉大さを示すものではない。むしろ同時に2つの極端に達し、その中間をすべて満たすことによって、それを示すものである。」(681)

『パンセ』の文章に躍動感が満ち溢れているのは、パスカルの生活が、ひとつの極からもうひとつの極まで運動すると同時にそれら両極を満たしていたので、波瀾に富みきわめて緊張したものであったからだ、指摘することができるであろう。

III

「序」で示したような短い断章のように、そのイメージがあまりに鮮やかなので、一度読むと忘れがたい文章が『パンセ』には数多く収められている。そこにはパスカルの緊張した生活が何らかの形で反映されていることが予想される。

『パンセ』のなかには「漸層法(グラダシオン)」の考え方が効果的に利用されているが、そこではひとつの極ともうひとつの極はそれぞれ正と反と呼ばれている。

様々な結果の理由。

漸層法。民衆は家柄のよい人を敬う。なま半可な識者は、家柄はその人自身の優秀さでなく偶然的なものだと言って、その人を蔑む。識者は、民衆と同じ考えからではなく、背後の思想によって、その人を敬う。知識より熱心さの方が強い信仰者は、識者がその人を敬う理由を知っていながら、その人を蔑む。というのも、彼は信仰によって与えられた新しい光でそれを判断するからである。しかし完全なキリスト者は、他のいっそう優れた光によって、その人を敬う。かくして人が光を持つにしたがって、その意見は正から反へと漸進する。(90)

「民衆」、「識者」、「完全なキリスト者」がそれぞれ正の段階を形成し、不完全な「識者」と不完全な「キリスト者」が反をあらわす。

他の断章でも3つの秩序が思考の核になっている。

世のなかには3種類の人々しかいない。1は、すでに神を見出してこれに仕える人々。他の1つは、まだ神を見出していないので、これを求めようと努めている人々。他の1つは、神を見出してもいず、これを求めようともせずに暮らしている人々。第1の人々は、

道理にかなっており幸福である。最後の人々は、愚かであり不幸である。中間の人々は、不幸ではあるが、道理にかなっている。(160)

この3種類の人々は断章90の「完全なキリスト者」、「識者」、「民衆」に置き換えることもできるであろう。そしてこの3種類の間は『パンセ』の世界観のなかで絶対的なものである。

パスカルのアポロジはそのうちの誰に向かって語りかけているかという、議論するまでもなく、それは中間の「識者」もしくは「また神を見出していないので、これを求めようとしている人々」に向かってである。そしてそのような人々に対して初めて説得の試みが可能なのである。彼らのみが聞く耳を持っており、かなり多くの断章において語りかけの対象になっている「あなた」は彼らなのである。例えばポール・ロワイヤルにおける発表のメモと考えられる断章149では明瞭な形でパスカルの意図があらわになっている。(パスカルは『パンセ』執筆の意図を隠したりすることはない。『パンセ』にはその意図、その方法、そしてその結果という具合にすべてが包含されている。) そうした説得が実行されている断章を部分的にはあるが、引用してみよう。

我は汝をして汝の信仰を理由なく我に従わせようとは思わない。また、暴君のような仕方汝を服従させようというのではない。我は、すべての事物の理由を汝に示してやろうというのではない。ただ、これらの相反を調和させるために、我は、我がうちにある神的な印を、説得的な証拠によって、汝に明らかに見させようというのである。(149)

口調がきわめて高圧的である。これが講演のためのメモだからそのような性格の文章になったということでは説明はつかないであろう。こうした語調はあちこちに散見されるからである。

無信論者に対してパスカルは彼らの理性、想像力に訴える文章を連ねていくが、理性に語りかける断章は概ね上の引用分のような雰囲気を持っている。絶対的に優位に立つパスカルが相手に理性の用い方を誘導していく。時には理性の限界を断定することもある。

理性の最後の一步は、理性を越える事物が無数にあるということを認めることである。それを認めるところまで到りえないならば、理性は弱いものでしかない。(188)

理性の説得がもっとも押し進められているのは、例の賭についての問答(418)である。その内容を今検討する余裕はないが、次のような記述を見る時、我々はパスカルがいかにかこうした議論に本能的に熱中したかということが感じられる。「ああ、この議論は私を熱中させる。それは私の心を奪う。」(418)さらにこの引用文に続きこの断章を締めくくるときの文章を読むとき、パスカルはやはり自己宣伝をしまっているのではないかと疑わざるをえない。

もしこの議論が諸君のお気に召して、有力なものだと思われるならば、それは、そのあとときに跪いて、無限にして不可分なこの存在に向かって、自己の所有する一切のものを

捧げ、君もまた君のものを君自身の幸福と彼の栄光のために捧げるように、祈っている1人の人間によって、書かれたものであることを、知ってくれたまえ。また、かくして力がこの謙虚と一致していることを、知ってくれたまえ。(418)

ところで、想像力はパスカルにあってはあまり肯定的な意味を担っていないが、読者の想像力に訴える文章こそ、我々がここで主として取り上げ、その切れ味の鮮やかさの秘密をいささかなりとも解明しようとしているものなのである。

人々は生きていくにさいして何の根拠も持っていないということを納得させるために、想像力を最高に刺激する演劇を例に、以下のように述べられている。

すべての大がかりな気晴らしは、キリスト教徒の生活にとっては危険なものである。しかし世人の考えだしたあらゆる気晴らしのうちで、演劇ほどおそるべきものはない。演劇は情念のきわめて自然なまた微妙な表現であるから、情念を刺激し、我々の心のなかにそれをかきたてる。わけても恋愛の情念をかきたてる。(中略)

かくして劇場を出るとき、人々の心は、恋愛のあらゆる美しさによって満たされ、また魂と精神は、恋愛の清浄さを信じているので、人々はちょっとした愛の感動にも動かされやすい状態になっている。あるいはむしろ、劇中であのように巧みに演出されるのを見たのと同じ快楽、同じ犠牲を受け入れるために、誰かの心にそういう感動を起こさせる機会を求めようとする状態になっている。(764)

引用の後半部分において演劇を『パンセ』に置き換えてみるといい。『パンセ』の議論の見事さの力で読者にキリスト教徒になろうと本心で思うようにさせるというのが『パンセ』の意図であるとするならば、それは基本的には演劇の意図と変わるところがない。かくして、パスカルは想像力に訴えるために技巧の限りを尽くす。

『パンセ』のなかに数多く見られる短い断章は、長くしようと思えば簡単に長くできる。断章90のように視点をずらしていけばいいだけである。例えばヴァレリーが思考ではなくして詩であるといつて非難した次の断章。

この無限の空間の永遠の沈黙は私に恐怖を起こさせる。(201)

この「私」はパスカルではなくして「まだ神を見出していないので、これを求めようと努めている人」の言葉だから、前後2種類ずつの人を補えば、ほぼ次のようになるであろう。「民衆は暗い夜を怖がる。生半可な識者は、夜の暗さは太陽が隠れているだけなのだからという理由で、夜の暗さを怖がらない。神を求めている識者は、夜の暗さに、自分に応答してくれるべき神の不在の象徴を感じて、それを怖がる。知識よりも熱心さの方が強い信仰者は、識者が暗い空を怖がる理由を知っていながら、夜の暗さを怖がることはない。というのも、彼は信仰によって与えられた新しい光でそれを判断するからである。しかし完全なキリスト者は、他のいっそう優れた光によって、民衆や識者の恐れを理解する。」最後の完全なキリスト者のところで、彼が夜の暗さを怖がるというようにならないところに、議論の進め方に

やや無理が生じてしまうが、基本的には大体このように膨らませることができるのである。このことは以下のそれぞれきわめて印象的な断章についても同じである。

2つの似通った顔は、いずれも別々では人を笑わせはしないが、一緒に並ぶと、その相似によって人を笑わせる。(13)

ただ通りすぎるだけの町ならば、人はそこで尊敬されたいとは思わない。けれども、そこにしばらく滞在しなければならないとなると、そのことを気にする。しばらくとは、どれだけの時間か？我々の空しい惨めな人生に相応したひと時。(31)

鸚鵡は、べつにくちばしが汚れてもいけないのに、それを拭う。(107)

死は、その危険なしにそれを考えるよりも、それを考えずに受けた方が、いっそう容易である。(138)

以上のように数えあげていけば、実に沢山ある。しかし、パスカルがそれらをこれ以上に発展させなかったのは、それなりの理由があるのではないかというのが我々の見解である。

5つの段階のすべてにわたって説明していくと理屈としてはよく分かるが、全体的に緊迫感がなくなり情念に訴える力も現象してしまう。もちろん理性に語りかけることも必要で、それは多くの比較的長い断章で実行されている。人間は理性でのみ判断し行動しているわけではないから、そのような文章ばかりでは人間を動かすことができない。だから、説得の術としてはどうしても感情を動かす、あるいは読者が意識しないにしても、読者の想像力を支配する力を備えた文章が必要となってくる。ヴァレリーが非難した断章「この無限の空間の永遠の沈黙は私に恐怖を起こさせる」(201)という断章は、まさしく、ヴァレリーの指摘するように、思考というより詩であるといった方がいいかもしれない。しかし、それもまたパスカルの意図したことだったということを我々は充分に心得ておかなければならない。

パスカルの生活からうかがうことのできた寛容の精神の欠如あるいは高飛車な態度は、パスカルの晩年にいたりほとんど水面下に隠れたかに思われるが、それらは地下水脈として流れており『パンセ』のなかにその噴出口を見出す。もちろんそれはパスカルの高度な文章術によって巧みに制御されている。とりわけ短い断章において、水脈が一気に噴出するかのような効果が得られている。

『パンセ』のなかの比較的長い断章は長編(中編)小説、短い断章は短編小説に譬えることも可能であろう。前者が全般的な叙述を行うのに対して、後者は一挙に的を射抜くのである。『パンセ』が素晴らしいのは両者がほどよく混在しているというところにあるのだが、我々はパスカルの本領は短い切れ味の鋭い文章にあると考えている。パスカルは性格的にもそれに向いていたのである。パスカルの短い断章に比肩できるほど凝縮して印象的な文章を書きうる人を我々は知らない。

註

- (1) Pascal, *Pensées* (Œuvres complètes de Pascal, Editions du Seuil, 1966), Fragment 165. これ以降、『パンセ』からの引用についてはラフユマ版の断章番号のみを記すことにする。訳文は松浪信三郎氏のもの（『定本パンセ』上下，講談社文庫，1971年）を借用させていただく。部分的に改訳したところがあるので，お断りしておきたい。
- (2) Gilberte Périer, *La Vie de Monsieur Pascal* (Œuvres complètes de Pascal, Editions du Seuil, 1966), P. 30. これ以降、『パスカルの生涯』からの引用については当全集のページ数を記すことにする。訳文は田辺保氏のもの（『パンセ』，角川文庫，1968年）を借用する。部分的に改訳したところがあるので，お断りしておきたい。

Sommaire

Sur quelques fragments courts et impressionnants des *Pensées*

Satoru YAMAMOTO

Nous pouvons trouver plusieurs fragments courts et très impressionnants dans les *Pensées*. Pascal aurait pu les prolonger selon sa méthode de gradation, mais il les a coupés tout courts. C'est d'abord parce qu'il n'aime pas, par sa nature, accompagner le raisonnement des lecteurs qui ne marche que très lentement, et ensuite que, comme Pascal sait très bien que c'est plutôt l'imagination que la raison qui persuade les hommes. Ces fragments courts sont destinés à s'adresser à l'imagination des lecteurs.

Nous pourrions expliquer plus minutieusement en prolongeant, par exemple, ce fragment célèbre, *Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie*, mais en ce cas-là il perdrait tout son brillant effet originel.

Tout en s'adressant plutôt à la raison des lecteurs dans les longs fragments, Pascal ne cesse pas d'exciter leur imagination dans plusieurs fragments raccourcis et tout à fait inoubliables.